天城遺産

Histrical / Natural heritage in Amagi town

シリーズ天城遺産　その２５

奄美・沖縄のお城？
グスクの正体とは

シマグチでグスク、グシクと呼ばれる遺構、遺跡は北は奄美大島から南は与那国島まで**490ヶ所**（奄美群島45、沖縄本島および周辺離島223、宮古諸島61、八重山諸島で161、一部中世のグスク以外の遺跡含む）と、琉球列島に広く分布しています。当初、グスクに「城」の字をあて、按司（アジ）と呼ばれる支配者の居城と考えられていましたが、昭和36年（1961年）以降にグスク＝城でないと大きな問題提起がなされ、その定義について論争が巻き起こりました。様々な意見が出されて、代表的なものは「聖域説」と「集落説」です。前者は古代祖先たちの葬所が、いつしか拝みの対象となり聖域になったとする説、後者は文献や構造などから支配者の居城とは別に、自衛のための石垣を持つ集落の跡とする説があります。これらの議論、意見を通じて、グスクが様々な側面を持つと同時に、グスクの発展段階より聖域（葬所）→集落→支配者の居城という段階を経て発展した、と考えられるようになっていきました。

徳之島では、昭和62年（1987年）の鹿児島県による調査で、島内13ヶ所の丘陵上や中腹に立地する城塞のような遺跡が確認され、そのほとんどが今でも「グスク」と呼ばれている地域にありました。一方で、グスクを含む地名は丘陵だけでなく、集落内などにも見られ、小字地名で30筆、伝承など口伝の地名が20ヶ所もあり、城塞とは考えられない地域を数多く含んでいます。従って、徳之島でもグスクは段階的に発展していき、その最たるものが丘陵の13ヶ所として残った‥と考えられています。

昭和60年（1985年）熊本大学文学部考古学研究室による発掘風景

出土した中国の陶磁器と思われる破片

もっと情報が見られる
電子版はこちら

※ 上記13ヶ所のほか、西阿木名のコウダグスクをはじめ、島内にはあと10ヶ所ほど伝承などが残っています。

編集：天城町教育委員会 具志堅亮、山田文彦